調査報告・県内の事例

学生PICK UP vol.9

小山市の外国人児童生徒適応指導教室「かけはし」でのボランティアを体験して

宇都宮大学教育学部　2年　青　木　さや香

1．ボランティアを始めたきっかけ

私は大学入学以前から、諸外国の教育や児童労働問題に関心があった。大学入学後には長期休暇を利用してインドを2回訪れ、現地で教育に関するボランティアを行ってきた。しかし、外国へ行ってみて思ったことは、私は日本の教育の問題について何も知らないということであった。そこで、2年生では国内の教育問題を考えるようにしてみたい、自身で体験し問題を深くとらえてみたいと思った。

ちょうどその頃、担任の丸山剛史先生から『栃木県における外国人児童生徒教育の明日を考える』という本をいただいた。その中には、現場の先生方と外国人児童生徒とのかかわりに関する多くの記事が掲載されていて、先生方の悩みや苦労が書かれていた。いまや学校によってはクラスに何人も外国人児童生徒がいると聞いたことがある。私は将来小学校教員を志望しているが、子どもたちの様子や教員の対応の仕方は聞いただけではわからないと思い、実際に関わってみたいと思った。

そこで、教育学部のスクールサポートセンターの先生にお願いしたところ、小山市の外国人児童生徒適応指導教室「かけはし」を紹介していただいた。

2．「かけはし」の授業

「かけはし」は、小山市立小山城東小学校内に設けられている。「かけはし」は、日本語がほとんど理解できない外国人児童生徒のために、一定期間、集中的に日本語指導や日本の学校生活への適応指導を行っている教育施設である。教室は2つの教室を使用し、クラスは習熟度別にわけられている。授業は、日本語で「起立、お願いします。」と言って始まる。児童は自由に発言し、自分のペースで問題を解いていく。覚えなければならないというプレッシャーは感じているようだが、日本語の意味が分かったときの反応はうれしそうであった。

私は主にアシスタントとして、机間指導を行っている。その中で、感じたことは、クラス分けされていても個人差が大きいということである。平仮名をすべて書ける児童もいれば、まだ五十音が覚えられていない児童もいた。児童の人数は少ないけれど一斉に指導することは困難であると感じた。

3．明るく風通しの良い職員室

初めて「かけはし」を訪れたとき、職員室が賑やかなことに驚いた。職員室には坂本鈴子先生とバイリンガルの教員が6人いる。先生方はパソコンに向かい何かを翻訳しながら、子どもたちのことを「今日は○○さんが～だったんですけど、どうしたらいいでしょう。」という具合に相談をしていた。その質問に教員皆で意見を出していた。担当の児童生徒はだいたい決まっているけれど、一人ひとりの学習内容や生活態度、家庭の様子を教員全員が把握しているようであった。

また、職員室には頻繁に電話がかかってくる。その多くは児童生徒と卒業生の親からである。どんな質問にも、バイリンガルの教員が丁寧に答えていた。

4．印象に残っているエピソード

ある日の放課後、「かけはし」の児童が学校に戻ってきて、校庭で自転車に乗っていた。それを見つけた坂本先生は児童を職員室に呼び、バイリンガルの教員が同時通訳しながら児童の行為について注意を促した。

「かけはし」は日本語を教えるだけではなく、日本の学校の規則を教える場でもある。坂本先生は「確かに日本の学校はあなたがいた国の学校に比べて規則が多くて、窮屈かもしれない。でもこれからは、日本の学校に通うのだからあなただけ守らないわけにはいかないのよ。先生はあなたの良いところいっぱい知っているけれど、通常の教室へ行って、規則が守れなかったら悪い子だと思われてしまうよ。」と指導していた。

坂本先生の言葉は、外国人児童の今後を思ってかけた言葉であった。伝えたいことを正確に伝えるには言葉が通じた方がわかりやすい。改めて、「かけはし」のようなバイリンガルの教員がいる教育施設は重要であると思った。

5．おわりに

日本の学校に早く慣れるために「かけはし」のような教育施設に通うことが重要であることはいうまでもないが、「かけはし」は、卒業しても近くで相談できる場所として関係者に安心感を与える役割も果たしていると思われる。改めて、その存在の大切さを感じている。